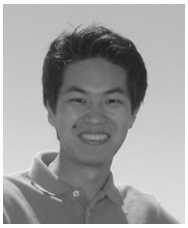
巻頭エッセイ

米国での生活とアクセント



平石　界

文化が異なると，人間のやることはいろいろと異なってきます。ここカリフォルニアでは，ローラーブレードで仲良く浜辺を滑走する40〜50代のカップルをよく見かけますが，これは日本ではまず見られない光景でしょう。もっとも文化が変われども変わらないこともあります。人類学者のDonald Brownはそのような Human Universalのリストを作っていますが，その一つに「言葉のアクセント*を気にすること」があります。ごく微妙なアクセントによって他人を「○○出身者」「××村の者」などと区別する傾向は，世界中のどこでも見られるというのです。

この傾向はさまざまな社会的影響を持ちます。例えば出身地以外の地域に出かけた時に，町中で聞こえる会話から，なんとなく自分が余所者の感じがして，落ち着かない気分になったことなどはないでしょうか。

個人的な印象ですが，アメリカでは日本以上にアクセントが意識されている気がします。先日，カリフォルニア州知事選にからんで，シュワルツェネッガー氏のアクセントについて話をふったところ，周囲の反応の大きさに驚いたことがありました。そこから話は米国の地域によるアクセントの違いに広がって盛り上がったのですが，特に，私が「南部アクセントはdullというが本当か」ときいた時は大変でした。カリフォルニアの中でもさらにリベラルな大学人たちのことですから，いかに南部アクセントがdullか，みんなで冗談めかして力説してくれました。しかし考えてみれば日本で「××首相の○○訛りは頭悪そう」などという会話がなされることは，たとえ冗談であっても，あまりないような気がします。

さて，アメリカ暮らしも数ヶ月経ち，アクセントについてもう一つ気がついたことがあります。それは自分の「英語のアクセント検出能力」が高くなったことです。先のシュワルツェネッガー氏ですが，以前は彼のアクセントはあまり気になりませんでした。これには彼の演じる役の台詞が比較的少ないこともあると思います。しかし最近，テレビで彼の映画を見ると，なるほどアクセントがあるな，とはっきり気がつくのです。一度気づいてしまうと，もう気にせずにはいられなくなる辺り，Brownの議論の正しさを証明しているようでもあります。

また周囲のネイティブスピーカーたちのアクセント（もしくは話し方の癖）も分かるようになってきました。このことで初対面の人の英語に「Daveと同じ話し方だな」などと対応できるようになるという，嬉しい副産物もありました。

残念なのは，他人のアクセントは分かるようになったのに，依然として自分のアクセントが直せないことです。録音した自分の声に違和感があるのと同じように，周囲に自分の英語がどのように聞こえるかは，なかなか分かりづらいようです。ごく簡単な単語が通じず，悔しい思いをすることも多々あります。「ホエールウォッチングに行きたいんだ」「何を見たいって？」「ホエール！　海にいる巨大なママルだよ！」「ああ，ホエール！」「（さっきからそう発音しているじゃないか！）」などというやり取りをしなくて済むようになるまでは，まだまだ時間がかかりそうです。

（＊註：「訛り」よりも中立的な「アクセント」を使います。）

（ひらいし　かい・東京大学社会情報研究所（カリフォルニア大学サンタバーバラ校心理学科在外研究中））